

子どもたちに一流の生き方を！

- ◇ 担任をしていた頃、「子どもたちに一流の生き方をさせたいなあ」と思っていました。おっと、勘違いしないでください。ここでいう「一流」とは、辞書的な意味でいう「その分野での第一等の地位。第一級」というものではありません。

私が、そう思うようになったのは、東京工業大学名誉教授であり心理学者でもある宮城音弥氏の次の言葉を知った時からでした。

「一流の人たちの共通点は、何に対しても積極的に取り組むこと。異常なまでの好奇心である」

- ◇ この言葉は、前鎌倉女子大教授の松永氏から教えてもらったものです。松永氏は、ある雑誌に次のように書かれていました。

一流って、才能でも能力でもなく、生き方なのです。「一流の人」は積極的・意欲的・熱中・夢中。何にでも挑戦してみる。まずやってみる。行動してみる。まさに「生き方」の問題なのです。「一流とは生き方の問題」だとすると、一流への門はだれの前にも存在するし、その門には鍵なんてない。その門を自分で押し開くかどうかである。「自分で押し開く」という「生き方」をとればいいのである。だれだって一流になれる。

しかし、私たちには何と多いことか。

「忙しくて、いやになってしまうよ」

「面倒くさい」

「仕方ないか」といやいや仕事をする。

「こんなことをすると皆はどう思うだろうか」と他人の目を気にしてしまう。

そして、自分から一流への門に鍵をかけてしまうのである。

- ◇ 子どもたちに「一流の生き方」をさせたいと思いました。一生懸命、意欲的、熱中夢中、結果より過程。まさに「一流の生き方」そのものだと思ったのです。子どもたちの燃え上がる学びや生活のエネルギーを引き出せたらどんなに楽しいでしょう。エンジンを全開させ、思い切り学習に生活に取り組む子どもたちを生み出せたら、どんなに素敵でしょう。そんなふうに考えるようになりました。

私の場合は、なかなか思うようにはなりません。特に学習面では「才能や能力」に左右される面を払拭できませんでした。そこで私は「これまでやってきた特活なら、子どもたちに一流の生き方を目指させることができるのではないかと考え、その道で実践していこうと思いました。学習面からのスタートが難しい子どもでも、そこから学習面に広げていけるんじゃないかと思ったわけです。

文責：スギタ